

**立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)**  
**個人研究費**  
**2007年度研究成果報告書**

|       |                                |        |
|-------|--------------------------------|--------|
| 研究代表者 | 所属・職名                          | 氏名     |
|       | 異文化コミュニケーション学部教授               | 実松克義 印 |
| 研究課題  | ボリビア・モホス大平原先住民族の宗教文化とその世界観について |        |
| 研究期間  | 2007年度                         |        |
| 研究経費  | 500千円                          |        |

**研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)**

本研究は、ボリビア・アマゾン、モホス大平原に住む先住民族の宗教文化とその世界観を、それを取り巻く自然環境との関連において調査研究し、その思想の本質を解明しようとしたものである。モホス大平原は広大な氾濫源であるが、この地の先住民族は古来より苛烈なアマゾンの自然環境の中で暮らしてきた。そこには民族独特の自然との共生の智慧が存在する。筆者は2007年度7月~9月にかけて約2ヵ月間現地に滞在し、三つの先住民族、モホ族、シリオノ族、及びグアラヨ族を調査した。シャーマン、その他のインフォーマントとの聞き取り調査を行い、またそれを補完するための文献調査を実施した。

**キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)**

[ アマゾン先住民族 ] [ 宗教文化 ] [ 自然観 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**調査先住民族と経緯**

2007年7月～9月に実施したボリビア・モホス大平原先住民族のフィールドワークの内容を以下に概観する。

モホ族文化に関しては、その文化の中心であるサン・イグナシオ・デ・モホス町を中心に、南方イシボロ・セクレ地域のエル・レティロ村、及び東方のサンタ・リタ村においてフィールドワークを実施した。調査に際してはサン・イグナシオ・デ・モホスに拠点を置くスペイン、カタロニアの先住民族援助組織 H O Y A M、またその姉妹組織の C I P C A B e n i のお世話になった。またサン・イグナシオ・デ・モホスでは、ドン・イグナシオ・アパセ町長に直接会い、モホスの政治・経済・文化に関して包括的な教示を得た。また同町のカトリック教会の図書館の膨大な文献資料を閲覧した。さらにはトリニダード市内に住むモホ族に関する調査を行った。グアラヨ族に関しては、トリニダード南方のグアラヨ族居住地、ナランヒート村を訪れ、フィールドワークを行った。シリオノ族については、その最大の居住地であるロマ・エビアト村を何度か訪れ、調査を実施した。トリニダード、ナランヒート、及びロマ・エビアトでの民族調査に関しては、トリニダードを基盤とするケネス・リー記念研究所、及びその代表者のリカルド・ボテガ・シーレス氏、またベニ県観光局のサポートを得た。

**モホ族宗教文化と自然観**

フィールドワークを実施した場所で最も印象的だったのはエル・レティロ村である。この小村はサン・イグナシオ・デ・モホスの南、約100キロに位置する。モホ族文化が比較的良好に保存されている場所として知られているが、実際に調査をしてみると、純粋なモホ族の伝統文化はほとんど残っておらず、存在するのが非常に強いキリスト教とのシンクレティズムであるということがわかった。

この村で聞き取り調査をした最重要人物は、アンヘリーナ・ノサ・シタという名前の女性シャーマンであった。アンヘリーナは村で唯一のシャーマンであるが、カトリックであり、キリスト教の教えを強く信じている。シャーマンとして治療を行うが、その時にも主イエス・キリストの力を頼むのである。ここには、伝統的な、土着のスピリットはもはや存在しない。興味深かったのは病気の原因の説明で、病気は悪い風が原因で起きる。風が吹くと、病気が起きる。ハリケーンが最悪で、去った後には重大な病気が発生する。そしてそれは主イエス・キリストの力によってのみ打ち克つことができるのである。

一見驚くような説明であるが、モホスという地域の特性を知れば、その意味するところは理解出来る。この地域には雨期と乾期があり、雨期には大風が吹き、また大雨が降って、大半が氾濫する。この自然観はとりもなおさず、モホ族の人々が、古代から絶えず自然の脅威にさらされて生きてきたことを示唆している。

**グアラヨ族宗教文化と自然観**

ナランヒート村はトリニダード南方約30キロに位置するグアラヨ族の居住地である。残念ながらこの村の人々は完全にキリスト教化されていて、伝統を受け継ぐシャーマンは存在しない。しかし聞き取り調査を行った、アンヘル・ヤシパリという長老格の男性によれば、ここにも少しは伝統的な文化が残されているようである。例えば土着のスピリットの存在である。例えばアングウエルというスピリットがある。このスピリットは森に住むが、風と共にやってきて、人々に害を与える。ウグトゥアルも同様のスピリットである。同様のものに、山のスピリット、イウイトウレがあるが、これも風と共に来る。湖、川のスピリットとしては、ウイアイスピ・アソワイチンがいるが、これも悪性であるという。

これらの伝統的スピリットは全て否定的な存在であった。やはり自然は危険極まりない存在であるということだろうか。モホ族の自然観との共通点を実感しないわけにはゆかなかった。

※ この(様式2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究成果の概要 (つづき)****シリオノ族宗教文化と自然観**

エビアト村はよく知られたシリオノ族の居住地である。トリニダートの東方約 80 キロに位置する。エビアト村のシリオノ族は福音主義教団、国際フォースクエア伝道教会によりキリスト教化された。そのため伝統的な宗教は形あるものとしては残っていない。またシャーマンもいない。しかしシリオノ族はムビア(狩人)と呼ばれ、昔から非常に強い共同体的傾向を持っていた。おかげでその伝統文化はモホスの他のグループとは比較にならないほど純粋な形で残されている。この村の宗教文化に関する重要な情報は、ミライヤ・スアレス・リベラという名の教養ある女性との聞き取り調査によるものである。

ジャーシ神話に代表されるように、シリオノ族の社会には豊かな伝承が残されている。月の神ジャーシはシリオノ族の創世者だが、留守中に人間に預けた息子をジャガーに殺害され、人間に怒りと絶望を感じて月に帰る。

またシリオノ族の宗教はアニミズムの世界であり、多くのスピリットが存在する。最も有名なのはアインゲ、アバッチュクワイヤ、エツィロケ、クルックアの四つのスピリットである。アインゲは死者のスピリット、アバッチュクワイヤは見えない、悪いスピリット、エツィロケはアインゲと同類、そしてクルックアは山に住むスピリットである。中でもクルックアが最も重要なスピリットで、シリオノ世界で最強の力を持っている。クルックアは山に、大木、木々の中に住んでいて、人々はクルックアに恐怖を感じている。

シリオノ族宗教文化で最も印象的なのはやはり、自然とともに生きてきた、シリオノ族の自然観であろう。ミライヤはこう言った。両親、祖父母、そして祖先からの教えがある。「山に触れてはならない、自然に触れてはならない。自然は恐ろしい存在であり、人間は自然を畏怖して、尊敬すべきである。人間は自然と調和して生きなければならない。またそうすることによってのみ生き延びることができる」

**モホス先住民族宗教文化と自然観**

以上の調査結果から、モホ族、グアラヨ族、シリオノ族の伝統文化、自然観、環境思想について何が言えるのか。

二つのことが言えよう。一つはこれら先住民族の伝統文化が、例外を除けば、純粋な形としては保存されていないということである。モホ族、グアラヨ族の伝統はほぼ完全にキリスト教とのシンクレティズムである。一方シリオノ族の文化は比較的保存状態がよいが、それでもキリスト教の影響は極めて大きい。民族固有の宗教的伝統は、多くの場合もはや存在せず、またそれを維持し、実践するシャーマンも、指導者もほとんどいない。

二番目には、にもかかわらず、これらの文化の中には、古来から伝わる独自の世界観、民族の知恵が、今でも記憶として刻印されているように思われる。

それは何か。

独特な自然観、環境思想である。モホス先住民族の間に存在するのは、圧倒的なアマゾンの自然に対する恐怖、畏怖の念である。モホ族は自然を恐怖の対象として見ている。風の存在が全てを物語っている。風とは大洪水、そして疫病をもたらす恐ろしい力である。それは自然の象徴として存在している。グアラヨ族の場合も基本的には同じである。自然は絶対的存在であり、畏怖の対象である。シリオノ族の場合は、伝統文化が今でも生きているので、この自然観は明確な思想として継承されているように見える。それは自然を恐れ、その力に圧倒されながらも、その一部として調和して生きようとするものだ。そこにはつつましい人間の意思、そして自然に対する畏敬の念が存在するように思われる。結論として、モホス先住民族の自然観は、シリオノ族の祖先からの言い伝えに要約することができよう。すなわち「人間は自然と調和して生きなければならない。またそうすることによってのみ生き延びることができる」。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①論文

実松克義「ボリビア・アマゾン先住民族文化における環境思想と自然との共生の実践：モホ族とシリオノ族を中心として」『国際行動学研究』第三巻 2008年4月刊行予定 12p

③研究発表

実松克義「ボリビア・アマゾン先住民族文化における環境思想と自然との共生の実践：モホ族とシリオノ族を中心として」国際行動学会第四回年次大会 2007年10月14日 立命館大学草津キャンパス